みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

収集後の資料にいかに情報を付加するか：基幹研究：民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-04-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 齋藤, 玲子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009031

PROJECT

収集後の資料にいかに情報を付加するか

文・写真
齋藤玲子

基幹研究 ● 民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討（2016－2019年度）

プロジェクトの目的とこれまでの調査

2年目を迎えた本プロジェクトの目的は、国立民族学博物館（以下、民博）に所蔵されているアイヌ民族の標本資料（以下、アイヌ資料）約5,000点の情報を充実させ、国内外のアイヌ文化に関心をもつ人びとに、より利用しやすいデータベースを提供することにある。あわせて、民具などの標本資料の収集が、アイヌ民族についての調査・研究とどのような関係にあったのかを、コレクションの成り立ちを分析することで明らかにしていこうとするものである。

データベースのための資料情報の整理は地道な作業である。本プロジェクトでは、アシスタント2名とともに、現在館内でのみ利用可能な標本資料詳細データベースの情報と元の台帳やノート類、関連文献などとの照合をおこない、修正や追記をしてきた。あわせて、資料名は一部に「現地名」としてアイヌ語が付いていたものの、大部分は日本語のみであったため、多言語表記に向けた準備を進めている。具体的には、アイヌ語と英語の資料名の案を作成し、収集地や収集者、製作者名等のローマ字表記などの作業を進めている。そのなかで、常に小さな発見があり、一方で疑問も見つかるが、新たな情報が飛躍的に増えることはあまりなかった。

博物館資料についての情報は、本来なら資料を収集する際や収集後すぐに記録しておくべきである。しかし、情報が残されていないものも多くあるのが実情である。筆者はこれまで、明治中期から昭和前期までに収集され、東京大学理学部人類学教室や日本民族学会附属民族学博物館（旧保谷市）から民博へ移管された北海道・樺太・千島の民族資料について、共同研究や文化資源プロジェクトのなかで、文献等から情報を拾い集める調査をおこなってきた（齋藤 2013; 2014; 2015; 2016）。

一方で、民博開館後に収集した資料については、ほとんど手を付けられずにいた。そのため、フォーラム型情報ミュージアムの本プロジェクトの一環として、それらの再調査をおもに聞き取りによって着手したので、本稿では、その成果を中心に紹介したい。

旧蔵者家族からの聞き取り

2016年12月に、貝澤守幸氏（1935-1977。以下、守幸氏）旧蔵の同氏の作品とアイヌの民具約200点について、ご家族から聞き取りをして記録をした。まずは、その人物と民博収蔵品の概略を示そう。

守幸氏は平取町二風谷生まれ、大工を職としていたが、1959年に木彫品製作が盛んな旭川にいた兄を頼りに本格的に木彫を始めた。1961年に二風谷に木彫の共同作業所が完成すると、指導者として同地に戻り、以降、家族とともに自身の店「貝沢民芸」を切り盛りしながら、木彫職人を多く育てた。42歳の若さで他界したが、彼の子どもたちをはじめ、二風谷で活躍する工芸家らに大きな影響を与えた人物である。二風谷のイタ（木彫盆）とアットゥシ（樹皮繊維製織物）は、2013年に北海道で初めて経済産業大臣が指定する伝統的工芸品となった。守幸氏の長男・守氏は木彫家として民芸店を継ぎ、二風谷民芸組合の代表理事として活動している。守幸氏の妻・雪子氏と次女・関根真紀氏、守氏の妻・美雪氏もアットゥシ織りや刺繍など、おもに布製の作品を手掛ける工芸家である。他の姉弟と配偶者らもアイヌ文化の継承活動に携わっており、守幸氏は今に続く二風谷の工芸の、立役者の一人と言ってよい。その旧蔵資料についての情報を収集して公開することは、民博での資料の活用にとどまらず、アイヌの工芸家や研究者にとって有益なことは間違いない。

同資料は、守幸氏没後の1987年度と2001年度に、当時民博の教員だった大塚和義（現名誉教授）が購入したものである。1987年度はレリーフの壁掛け、欄間、人物像など同氏の作品ばかり17点で、2001年度は作品数点も含むが、ほとんどが民芸品店に陳列されていた民具や、守幸氏が愛用した衣類などである。これらの資料の一部には製作年と製作者名が資料に直接記載されているが、大部分は情報がない。しかし、さいわいに守幸氏の妻・雪子氏は健在で、守幸氏逝去時に小中学生だった子息たちからは、これまでにも、1960～70年代から現在にいたるまでの二風谷の工芸の歴史や技術伝承などについて話を聞いていたので、それらに関しても有意義な情報が得られるとの確信があった（齋藤 2017）。

貝澤守幸氏の作品に関する聞き取り調査。左から長男・守氏、二男・昌幸氏、妻・雪子氏、次女・関根真紀氏（2016年12月7日、民博・展示準備室）。

そこで、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授（本プロジェクト共同研究員）との共同調査という形で、守幸氏の家族を民博に招聘して資料をじっくり観察してもらいながら、聞き取った情報を記録した。その一例を挙げよう。

○木彫品（レリーフ）（H0149594）についての聞き取り記録

（一部。話者の敬称略。丸括弧内は筆者の付記）

山崎　「二風峰」というサインは最後のほう（晩年の意味）？

雪子　最後のほうだよね。「二風峰」って自分であれしたの。よくサイン彫ってたでしょ。

山崎　最初は彫ってなかったんですか？

雪子　彫ってなかったです。

・・・中略・・・

木彫品（H0149594）。3頭の熊に鮭、もみじなどが彫られている。

真紀　でもこのもみじの進化、じゃないけど、そういうのとか見ていったら順番わかるんじゃない？全部並べて。

雪子　これ上手だよ、すごい。ね、毛並みも。

昌幸　爪もすごい。

真紀　爪ね。この爪だけがかわいそうだけど。

雪子　かならずこの笹と葉っぱは付いていますよね。で私これ彫ってるとき、この足の裏丸見えっていうのおかしいって言った覚えある。なんともない、って言ったけど。（守氏に）思わない？

齋藤　さっきおっしゃっていた、その周りのもすごい（彫り）。

雪子　これね。ほんとに特徴だもんね。みんなに線付いているよね。（別の資料：H0149595 を指して）あれにも付いているし。

守　時期的に一緒なんだよね。

雪子　うん。こういうこの周りも、スッスって。縦に彫れないからこう横にじゃなかったら（刃が）きかないでしょ。木はこう立ってるからね。こう（縦に）彫るとさかむいたりなるから。

山崎　守幸さんの彫る熊っていうのはなんか特徴とかあるんですか？

雪子　なんていうか、この顔なんだよね。

山崎　鼻のところに3本線とか？

真紀　付いているのと付いてないのとあるんじゃない？

雪子　付いているんじゃない？これ怒ってるのかい？鮭くわえてるからかい？おそらく。

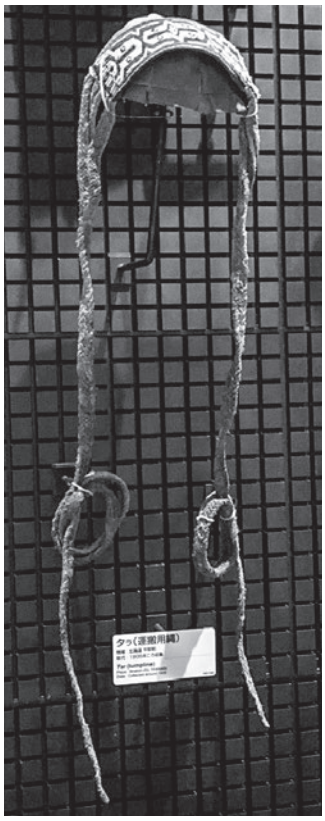
山崎　あとそのシールについて教えていただけますか？

雪子　これは指導員のマークです、訓練校の。職業訓練指導員で国から頂いた、なんていうの、看板じゃなくて、資格？指導員の免許の（バッジ）。それをおそらく、シールを作って貼ってあるんだと思う。この色もまったく同じで。

以上はほんの一部であるが、守幸氏の作品すべてと、おもな民具について、聞き取りの様子を動画や録音で記録をし、文字起こしをした。製作年代、作り方やデザイン、使い方、付属品などの資料に直接関するものから、時代背景や製作者の相関関係に至るまで、さまざまな有益な情報を得ることができた。アイヌの工芸や観光について関心を寄せている筆者にとって、研究上でも有用な情報を聞くことができた。これらの情報は、北海道大の山崎准教授とさらに整理と分析を進め、貝澤一家の監修を経て、公開していきたいと考えている。

資料の熟覧調査に対する期待と今後

また今年度は、本プロジェクトの共同研究員である北海道博物館アイヌ民族文化研究センターの大坂拓研究職員により、民博所蔵のタラ（荷縄）とエムシアッ（刀帯）約90点の調査もおこなわれた。大坂は、毎年、対象を決めて博物館等に所蔵されるアイヌ資料を調査し、収集地・収集年などの背景情報を有する資料をもとに分類案を提示して、地理的分布や変遷の研究を続けている。これまでに儀礼用冠や刀帯についての論文を発表しており、今年度は各地の博物館等で「荷縄」の調査をしながら、刀帯の補足調査をおこなっている。情報の少ない本館の刀帯について、すでに多くの同様の資料を調査した大坂は、時代や地域が推定できるものもあるという。付随する情報が少なく、文献もないような資料であっても、専門的な視点で調査をおこなうことで、情報を付加することも可能であろう。



展示中のタラ（H0011064）。当館の展示のキャプションでは、日本語の名称を「運搬用縄」としたが、大坂は「荷縄」としている。資料名をどう表記すべきかも、データベース作成では重要である。

民博では毎年、公益社団法人北海道アイヌ協会から工芸者技術研修として、数名の工芸家を外来研究員として受け入れており、今年度も2名が来館して、「ござ」と「着物および前掛け」の文様や製作技術について調査研究をおこなうことになっている。彼女たちとともに資料を調査し、現段階の情報を吟味するとともに、新たな情報が得られることを期待する。

そして、上述のような若手研究者や工芸家らにとって使いやすく有用なデータベースにすべく、プロジェクトを進めていきたいと考えている。

【参考文献】

齋藤玲子　2013「日本北部周辺の先住民族資料の理解のために」『民博通信』141: 18-19。

――2014「日本民族学会附属民族学博物館の収集資料」『民博通信』145: 22-23。

――2015「坪井正五郎によるアイヌ民族資料の収集」『民博通信』150: 18-19。

――2016「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155: 10-11。

――2017「民族文化の振興と工芸――北海道二風谷の木彫盆・イタから考える」飯田卓編『文明史のなかの文化遺産』pp. 209-232、臨川書店。

さいとう れいこ

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。アイヌ民族をはじめ北米の先住民の物質文化などについて比較研究をおこなっている。最近の論文に「藤戸竹喜と木彫り熊とアイヌ文化―旭川から阿寒湖、そして世界へ」（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 編集・発行『現れよ。森羅の生命―木彫家 藤戸竹喜の世界』所収 2017年）。